

小説家 ^{こでまり} 小手鞠 るい



写真1 森の家

ウッドストックの森に居を構え、さながらソロの森の暮らしを実践されているような小説家の小手鞠るい氏。かつて、アメリカで高齢者のストックごみを片づけられた経験談をもとに、今まさに高齢化社会の日本で、私たちはどんなライフスタイルを目指していけばいいのかについてのご寄稿文をいただきました。

1 シンプルで豊かな森の生活

かれこれ20年あまり前から、森の中で、樹木に囲まれて暮らしています。ニューヨーク州北東部に広がっている深い森です。このエッセイも、森の仕事部屋(兼自宅)で書いています。

家の前庭はそのまま野原になっていて、野生の鹿やうさぎが草を食べに来ます。野原には自然にできた池があり、蛙やいもりや亀が棲んでいます。春先には、冬眠から目覚めたばかりの熊が水浴びにやってきます。裏庭は、州の所有している広大な森につながっています。近隣の家々は、樹木に包まれていて見えません。

いちばん近くにある町までは、車で

二十分ほど。親しい友だちは人間ではなくて、草花や樹木や動物たちや小鳥たち。不便で孤独で楽しい森の生活が気に入っています。

森には、無駄なものがないとつありません。

秋の終わりになると、草は枯れ、広葉樹からは色づいた葉っぱが舞い落ちます。風が吹けば、小枝が折れて、地面に散らばります。降雪によって、老木が倒れることもあります。枯れ草も落ち葉も小枝も木も、みんな土に還っていきます。生き物たちもまた、なんらかの理由で命を落としても、ほかの生物の栄養になるか、土に還るか、どちらかです。泥や苔や藁を利用して作られた小鳥の巣。雛鳥が巣

立ったあとは、土に還ります。

つまり、森には「ごみ」というものがまったく出ないのです。

すべては土に還って、土の栄養となり、草や樹木の栄養となり、樹木は毎年、新芽を出し、若葉を広げ、秋には枯葉になって地面に落ちる。そのくり返し。静かな循環。森とは、言ってしまうと自然界とは、なんて潔くて、なんてシンプルで、なんて豊かなんだろう、と、私は日々、胸を打たれています。

森の小道を歩いているとき、まれに、心ない人の捨てたごみを発見することがあります。空き缶や空き瓶、煙草のパッケージ、ビニール袋など。そういったものが、たったひとつ落ちていただけで、見てはいけないうるものを目にしたような違和感を覚えます。美しく、神々しい森に、人間の落とした汚点を発見したような気持ちになるのです。

ああ、人間がいるなど、思ってしまう。地球で唯一の環境破壊者である愚かな人間が、ここにもいるんだな、と。

2 最終章の予行演習

森の生き物たちのように、たったひとつのごみも出さず、たったひとつのごみも残さずに死ねたら、どんなにいいだろうと、このごろの私はよくそう思います。

私と夫は、60代と50代のカップル。人生という名の物語の最終章を目の前にして、そろそろ締めくり方を考えるべき時期にさしかかっています。

10年前と数年前、2度にわたって、その「予行演習」を経験しました。

夫の母親(アメリカ人です)は現在、80代後半。彼女は70代の終わりごろ、みずから進んで、医療施設付きの老人向けマンションに入居したのですが、結婚、離婚、再婚を経て、再婚した夫の死後も独居をつづけていたのは、部屋数も多く、広々とした2階建ての一軒家。そこから2LDKのマンションに移るようになったので、それはもう思い切って、さまざまな物を整理、処分したようです。

私たちのところへも、ある日、ダンボー



写真2 森の鹿

ル箱 10 個分くらいの「物」が送りつけられてきました。絵画、美術品、置き物、時計、アクセサリー、バッグ、洋服、本、写真などなど。彼女にしてみれば良かれと思って、捨てるには忍びないものを「これは息子に、これは息子の嫁に」と選り分けて、送ってきてくれたのでしょう。

受け取った私たちは、どうしたか？

義母には内緒ですが、すべて処分しました。ひとつ残らず何もかも。

ダンボール箱をあけて、中身を取り出す端から、夫は「これはごみ、これはリサイクル」と選別して、処分していきます。「いいの？お母さんの大切な思い出の品でしょ？」

「彼女にとっては思い出の品でも、僕にとっては単なるごみに過ぎない」

ある箱の中からは、離婚した最初の夫（つまり、私の夫の父親）といっしょに写っている結婚写真と、結婚指輪が出てくるではありませんか。

「処分していいの？これって、あなたの両親の写真でしょ？」

「離婚した親の結婚写真なんて、持っても縁起が悪くなるだけだよ」

「指輪はどうするの？これって、ダイヤモンドでしょ？」

「ああ、それは質屋に持って行って売ろう」

義母は私に指輪をはめてほしかったのかもしれませんが、あいにく私の指にはサイズが合わなかったし、仮に合ったとしても、夫のいやがる指輪をはめる気にはなりません。

ここまですが 1 回目の予行演習。

一軒家から 2LDK の新居に引っ越した

義母が、旅先で階段から足を滑らせて転倒し、骨折したのは、おととしの春のことでした。退院したあと、認知症の症状が出始めていたため、彼女は介護人付きの病棟の一室に移ることになったのです。

さあ、大変！

それまで住んでいた部屋には、ベッド以外に、ダイニングテーブルと椅子 4 脚、リビングルーム用の家具——ソファ、椅子、コーヒータブル——その他にもステレオセット、本棚、飾り棚とその中身などなど、まだまだたくさんの「物」が置かれていました。

ふたたび整理と処分をしなくてはなりません。しかし、彼女はベッドに寝たきりの状態になっています。

ここで、ひとり息子である夫の出番です。「お母さんのお部屋にある家具や物はどうされますか？整理もしくは引き取りにいらっしゃいますか？」

老人向けマンションのスタッフからかかってきた電話に答えて、

「業者に頼んで、すべて処分してください。

ええ、すべてです。何も残さなくていいです。彼女の希望に従って必要最低限のものだけを残していただき、あとは全部まとめて処分してください。はい、全部です。お金はいくらかかってもかまいません。では、よろしくお祈りします」

これで終わりです。簡単でした。電話一本で終わりです。「天晴れじゃないの！なんて潔いの」と、私は夫をほめてあげました。

おそらく、このエッセイを読まれている方々の中には「それではあまりにも薄情なのでは？」「お母様がかわいそうなので

は？」と思われる方もいることでしょう。気持ちはわかります。

わかりますが、たとえば、私にとってはそれが思い入れたっぷりの、非常に大切な、かけがえのない思い出の品であっても、他人にとってはそれはただのごみでしかない。生きているうちは、たくさんの思い出の品に囲まれていようと、いまいと、それはその人の自由です。けれども、思い出の持ち主が亡くなったあと、その物には、誰の思い出ももっていない。第一、亡くなった人は、思い出と思い出の品を所有して天国へ行くことはできないのです。

義母には感謝しています。

とても貴重な予行演習をさせてもらえました。二度も。

3 50年分のごみ

まだ記憶に新しい、予行演習の話をもうひとつ。

夫の経営している会社が所有している、マンハッタンのアパートメント。「スタジオ」と呼ばれている、ひと部屋に台所とバスルームがついているだけの簡素な部屋。



写真3 50年分のごみ



写真4 50年分のごみ

そこに 50 年以上、住んでいた借り主が末期癌のために亡くなって、あとに残された物を、私たちふたりで処分することになったのです。彼女は、若い頃からずっと、ひとり暮らしをつづけていたようです。職業は、雑誌や書籍の校閲者。

病院から夫に届いた最後の手紙によれば「部屋に残っているものはすべて、あなた方に差し上げます」とのこと。

「差し上げますと言われたってねえ、欲しいものなどあるわけがないし、要するにこれは彼女が自分で処分できないから、おまえたちでなんとか処分してくれという、押しつけだな。やれやれ。どれだけ時間と費用がかかると思ってるんだ」

ぶつぶつ言いながら（つぶやいているのは夫です）、私たちは部屋を訪ねました。

ドアをあけて、一步、中に入るやいなや、「うわあああっ！」

大声を上げてしまったのは、私です。

圧倒されました。すごかったです。部屋の中はごみ、ごみ、ごみ、ごみだらけ。

こんなごみの山の中で、人は生活できるものなのかと、驚きを通り越して、感動すらしてしまいました。ここで写真をご

ご覧ください、私のびっくり仰天が決してオーバーなものではないと理解していただけることでしょう。

亡くなる前の数年間、彼女は癌と闘っていたので、整理整頓が思うようにできなくなっていたのでしょう。そのことには、大いに同情しなくてはなりません。けれどもやはり彼女は私にとっては反面教師。「こういうふうに、他人に迷惑をかけるような終わり方はよくないし、したくないし、してはならない」と、つくづくそう思いました。

処分専門の業者の男性ふたりと、私たちと、掃除の専門業者の女性ふたり。

合計6人で、朝8時から始めたごみ処理の作業は、夕方の4時過ぎまでかかりました。彼女の20代から70代までの人生、50年分のごみと思いがうず高く積み上げられたトラックが去ったあと、空っぽになった部屋には、ひとりの女性の50年間の喜びや悲しみの余韻だけがかすかに残っていました。

4 古き良き時代に学ぶ

禅の世界には「放下着」（ほうげじゃく）という教えがあるそうです。

意味はずばり「手放して、手放して、手放し切りなさい」。何を手放せと説いているのかというと、それは執着です。あれも欲しい、これも欲しい、あれを持ちつづけたい、これだけは処分したくない。物だけではなくて、仕事や人に対する執着もあるでしょう。収入や財産や見栄や名声に執着している人もいるかもしれません。

「執着」というのはすなわち、心にと



写真5 町に行む看板

まっている「ごみ」ではないかと私は思うのです。執着が人の心を窮屈にし、束縛し、苦悩を生み出すように、ごみもまた人の心を、そして体をも窮屈にし、束縛し、不自由にしているのではないのでしょうか。ごみを捨てて、捨てて、捨て切って、身辺をすっきりさせれば、心もきつとすっきりすることでしょう。

しかしその前にまず、捨てなくてはならないごみになるような商品を買わない、求めない、溜めないという心がけが重要だと思います。捨てないためには、処分しないためには、そうなるようなものを買わない。要は賢い消費者になれ、ということでしょうか。

次から次へと生産され、市場にあふれ返っている、便利な新製品。それらは本当に便利なののでしょうか。その便利さは本当に、日々の暮らしに不可欠なののでしょうか。その便利な新製品は、時を経ずして、ごみに変わってしまわないのでしょうか。

アメリカから日本へもどったとき、非常に目につき、耳にもつく言葉のひとつに「新発売」があります。まだ前の品物がじゅうぶん使えるのに、人々は新しい商

品を買うよう、日々、背中をつつかれているかのようなのです。

古い品物には、新しい品物にはない良さがあります。

ページの角がすり切れるまで気に入った本を読み、溝がつぶれてしまうまで気に入ったレコードを聴いていた時代には、今の時代にはなかった、くつろぎや落ち着きやゆとりがあったように思います。時間がゆっくり流れていました。ゆっくり思いを馳せたり、考えたりすることができました。紙コップや使い捨てのプラスチックの食器ではなく、たとえ縁が欠けていても手作りの陶器でくり返し味わう、一杯のコーヒーの美味しかったこと。

賢い消費者になるためには、マスコミや企業の謳い上げる「新発売」や「簡単で便利でスピーディ」に惑わされることなく、過剰な情報の洪水に押し流されることなく、自分にとってより快適な暮らしを、シンプルで心豊かな生活を築いていくこと。それが多少、不便な生活であっても。

言いかえると、老後に一気に物を処分しなくてもいいライフスタイルを、若いこ

ろから地道に作り上げていくことが大事だと思います。

それはそんなに難しいことではありません。ごみになるようなものは買わない習慣を身につけること。人工的な物質—ごみになって残る物—ではなくて、自然界—美しく潔く消えていくもの—に目を向けること。速くて便利なことよりも、時間がかかって不便なことの良さを見いだすこと。買う、ごみを増やす、ごみを溜める、という「足し算の生活」ではなく、買わない、ごみを出さない、ごみを溜めない「引き算の生活」を心がけること。

足すのではなくて、引くのですから、簡単です。買うためにはお金が要りますが、買わないのですから、お金もかかりません。重い荷物を背負って山に登るのは大変ですが、荷物を減らせば楽々と登れます。背中から、身辺から、家の中から、ごみになるような「物」を減らせば減らすほど、持たないでいればいるほど、足取りも心も軽くなり、老いてもなお軽快に歩いていけるのではないのでしょうか。



プロフィール
小手鞠るい Rui Kodemari

1956年岡山県生まれ。同志社大学法学部卒業。92年に渡米、NY州ウッドストック在住の小説家。

1981年にサンリオ・詩とメルヘン賞を受賞。1993年『おとぎ話』で海燕新人文学賞を受賞し、小説家デビュー。2005年『欲しいのは、あなただけ』で島清恋愛文学賞、2009年『ルウとリンデン 旅とおるすばん』（絵／北見葉胡）でポーロニャ国際児童図書賞を受賞。大ヒットした『エンキョリレンアイ』（新潮文庫）から始まる“恋愛3部作”など、“恋愛小説の旗手”であるとともに、猫に関する小説やエッセイでもおなじみ。最近では、大学の文学部で創作講義を担当する一方で、WEBマガジンでもシンプルライフを提唱するなど、益々幅広い活動を行っている。著書に『九死一生』『アップルソング』『テルアビブの犬』『優しいライオン—やなせたかし先生からの贈り物』『星ちりばめたる旗』など多数。